

『飛鳥から遙かなる未来のために（朱雀・後編）』

日本がまだ倭（やまと）と呼ばれていた古代。大后・炊屋姫は竹田皇子をいよいよ大王に就任させようとしていたが、ある決断を迫られる。

仏教興隆、東アジア諸国の権謀術数、倭国の外交交渉、大王軍の創設など、若き上宮皇子（聖徳太子）たちは本格的に国造りに取り組んでいく。

この物語は、『日本書紀』その他の書物に鋭い疑問を投げかけ考察した、今迄にない歴史小説である。

【表紙】

